

報



會

會 岳 山 本 日

92

月 二 年 五 十 和 昭

山西省境

渡 邊 公 平

共産八路军がゴソ／＼やつて呉れた御蔭で昨秋以來ねらつて居た河北・山西省境の山岳地帯をいやと云ふ程歩いて来ました。高さは大したことありませんが、(最高二五〇〇m)支那地圖による五臺と小五臺とを結んでゐる山脈で蒙疆地區の土マンジュウみたいな山とは違ひ、どのピークも岩壁をむき出して削立し、溪谷は水清く楊柳亦少からず、故國の谷を歩いてゐる様で、毎日テゴを出す様な行軍も少しも苦にならず、追かけ乍らも八路军に感謝したい氣持でした。

十一月の末だったので溪流は大半氷に蔽はれ中央の流線部だけが口をあけ、ところ／＼アイスブリツヂを渡つたりして大に感じを出しました。軍醫さんの測つた氣温によると最低マイナス三十七度といふ日がありました。それ程には感じなかつたが相當谷底は冷えました。雪にもあひました。粉雪で、スキーでもあつたらと残念至極、三百キロ程溪から溪へ、峠から峠へと追敵ワンデルングを續け結局眞黒になつて〇〇へ歸つて来たのが十二月の半ば、或る日の夕暮れゆく西の空に仰いだ雄大な五臺山の稜線が未だに忘れられませんが、流石に五臺は高いと思ひました。どんな山奥へ入つて行つても支那人は耕して居ます。若し漢人をして信州に住ましめたならば、潤澤池ノ平はおろか、五色ヶ原や太郎兵衛平もお花畑の儘ではおかなかつたでせう。人煙稀な岩峯の中腹にさへ畑を作つてゐる生活力の根強さには舌を捲くより他にありませんでした。

岩石のゴロ／＼した徑ばかりなので兵隊の靴は相當傷み、登山靴の必要をさへ感じましたが、伊太利や佛蘭西のアルプス兵は一體どんな靴をはいてゐるのでせうか、知り度いもんだと思つて居ります。過去の登山がお役に立つたこと今回の討伐に於て甚だ顯著です。行軍は戰鬪の基礎だと僕は考へて居ます。いくら射撃の名手でも行軍でのびてしまつちや没法子です。入營前の若い人達は大きに歩いておくといふと考へます。ちよつと御報告まで。(一二・三〇)

三石山と羊齒

行 方 沼 東

安房と上總の國境に近く三石山といふ二八〇メートルばかりの丘陵がある。三つの巨岩がその山頂を形成してゐるのでその名がある。岩を抱いた觀音堂を三石觀音といつて近隣に相當著名で參詣者も多い。ところでこの三石山は殊に羊齒類が多く繁茂してゐるので、羊齒を探る丈でこゝを訪れる價値は十分にある。ましてその山頂の巨岩の背面には高山性を帯びたイハギボシ・イ

ハタバコ・ウテフラン・ダイモンヂサウ・ミスミサウ・カンアフヒ等の成育を見、一寸三百米位の小丘でこの植物景觀は面白いものだと思ふ。岩の上から遠望する鹿野山、高岩山其他國境群山起伏の様も低い乍らに捨て難い。

羊齒類は西北に面した表登山道の兩側林中に一面に繁茂し壯觀を極めてゐる。大體のものをあげても——
ウラボシ科
ミゾシダ、イヌワラビ、キヨダキシダ、ワラビ、ヒメワラビ、ゲシゲシダ、シケチシダ、クマワラビ、クサツテツ、イヌガンソク、ヤブツテツ、ヒロハヤブソツテツ、エノデ、ツヤナシエノデ、ホシダ、コモチシダ、ジュウモンヂシダ、マチシノブ、クリハラン、オホバノハチジヨウシダ、オホアマクサシダ、オリヅルシダ、リヨウメンシダ、キジノオシダ、シラガシダ、クジヤクシダ、ハコネサウ、キノモトサウ、ツルテンダ、ミツデウラボシ、トラノオシダ、イワガネサウ、ホラシノブ、ホソバカナワラビ、ヒメカナワラビ、ヘラシダ、ノコギリシダ、マメヅタ、ゼンマイ科、ゼンマイ、ウラボシ科、ウラボシ、ハナヤスリ科、ナツノハナワラビ、オホハナワラビを數へることが出来る。また前記の山頂には——
ウラボシ科
ピロードシダ、ハコネサウ、クモノ

スシダ、オサシダ、イダチシダ、ツルテンダ、ノキシノブ、マメヅタ、を産し清澄ハイキングコース方面には美しいオサシダの群落も見られる。羊齒類に興味を持たるゝ人は是非一度行つて見らるゝことをお勧めする。房總線木更津驛にて龜山線に乗換へ終點龜山より四キロ途中に(少し廻り道すれば)ラヂウム龜山鐵

目 次

- ・ 山西省境 渡邊公平：一
 - ・ 三石山と羊齒 行方沼東：一
 - ・ 有峰より平湯への田舎道 田邊主計：二
 - ・ 富士ヒユツテと愛鷹山莊 冠松次郎：三
 - ・ 尺岳山の家焼失に就て 藤崎氏に答ふ 瓜生 正：四
 - ・ 冬のゼム氷河附近 望月達夫譯：四
 - ◆ 新著紹介 六
 - ◆ 切抜帳 七
 - ◆ 會員通信 坂江・東藤島：七
 - ◆ 會務報告 七
- 泉もある。東京を早朝發して日歸りに丁度よろしい。三石の外にも房總半島の清澄山、元清澄、富山、石巻山、高山岩等の抱擁する丘陵地帯は羊齒類の成育が盛んである。時には岩と雪とを離れてかうした低山迂曲の間を漫步しつゝ路傍の植物を探るのも又山登りに許されたる一部分ではあるまいか。

有峰より平湯への田舎道

田邊主計

十一月十六日（昭和十四年、一九三九年）の夜上野驛をたつて富山へ向ふ。會員藤島君と二人。旅行の行先が何となく決まるのは考へて見るとおかし。尤も、この旅行は春頃から心の内にあつた。いや、有峰を再び訪れたいといふ心持はこの前、もう五年前になる、薬師岳からおりて来て二晩をこの地に過して大多和へ出た時からである。四月末であつたがこの地では一日中雪が降つた。有峰は近く水電工事のため水の底に没するときいてゐる。それまでに再びこの静かな廢村を訪れたい。有峰の地圖を見るとそこから東谷を入つて鞍部を越して打保村へ出ること、別に引つた人の話はきいてはゐないが、一日で樂に行けるやうに思はれる。それから次の日に更に南へ山吹峠を越して船津から平湯への街道へ出るのは山道といふよりも田舎道である。藤島君も別に異存はないといふので、みちは決つた。も一つの目的が私の氣持の中にあつた。蘆舩寺の人たちの様子を知らたいといふことである。最後に行つたのは立山谷をおりた時だからやはり数年前に入つてゐるだらうか。今度は三人の年輩の案内を指名してそのうち誰か一人きて貰ひたいといふ組合へ手紙を出

して置いたが、千垣驛に出現へた案内は私には初めての人であつた。一人は一時よくなつた身體が又思はずなく今は山歩きも出来ないといふことである。一人は他の仕事で忙しくて餘り山に入らない。も一人の案内は今立山へ入つてゐるから私が来ることになつたと云ふ。私の知つてゐる人も既に数人の戦死者の中に加はつてゐる。又、歸還した人々の中には縣廳の方へ行つて働いてゐるとか或ひは「つとめ人」になつてしまつて山へは入らないといふ人もある。自ら都會へ出たり又軍需工場などへ勤めることを希望する人々もあるが、又歸還兵を庇護するといふ意味で縣なんかで職をあてがつたりするといふ事もきいた。しかし、私は此等の若者がその土地や山々に強い愛着を持ち素直に逞しい山人として育つことを希つてゐる。それらの人々が村を離れ、餘り山にも入らないといふことは淋しい。

和川に沿つて行く。有峰の水電工事は戦争のためにおくれてゐる事かと思つたが、既に有峰の入口には大きな工事が建設されてゐた。翌朝見たのだが、山腹には標示板が建てられてゐる。あそこまで水が来るのですと案内は言つた。有峰へ着いた時は暗くなつてゐた。

十一月十八日。誠に良い天氣である。ゆつくり起きて、辨當を持つて裏山へ登つて薬師岳を眺めて暮す。風もなく上衣も着てゐられない程暖

つたかい、草地に五時間寝ころんだまゝ一歩も動かす。薬師岳は既に純白。青空の下そのゆつたりと大きい尾根を倦かす眺める、近く又行きたい。十九日朝一面の霜、再び快晴である。東谷をのぼつて谷の分れた所で右の谷へ入つて行く。鞍部で一時半。案外時間がかかるものである。そこからどう行くか、案内は木に登つて行手を眺めたりしたが、とにかく身丈より深い笹を分けて行くと間もなく澤の先祖である土の窪んだ所へ出た、結局それは澤となり、下りて行くときやがて古い堰のある所に出た。その邊へは道が下から入つてゐた。打保村へ出る所の草山はきれいだ。村の處で暗くなる。或る農家に泊めて貰つたが、ちやうど御祭のある晩で御赤飯を御馳走になつた。それに、その家の人たちは誠に氣品も良く親切なものであつた。

二十日。朝少雨。それがやんで出掛ける。山吹峠へ登る森茂牧場もきれいな所である。峠を越した所から雨。濡れて見座へ着く。翌朝蘆舩寺の案内は富山へ歸り、我々は平湯へ行くことにする。

現時田舎の乗合自動車はガソリンの配給が貧弱な爲め極めて不自由な状態にある。平湯も隔日であるからあしたでなければ行かぬといふので我々は栃尾まで行つてあとは歩いて。栃尾からは自動車があつても歩くつもりではあるが。地方に於て唯一の交通機關である場合の自動車

が不自由な事は著しく困る事である。我國の道路の粗悪なことと自動車運輸の貧弱なことは驚嘆に値する。しかも今後それらの改善發達を計り得るのはいつの事であらうか。又、田舎の人々のそれらの乗物に乗り方の良くない事も驚くに足りる。例へば、無賃の子供を一人前に腰かけさせて居たり（子供が可哀さうだと言ふ）荷物を亂雑に積込んでゐて、「満員お断り」といふのである。富山へかへる案内も船津行は満員だといつて乗車を断られてゐるので、かけてあつて、座席をちよつと整理したら、乗れただけでなく腰をかけて行けたのである。大體自分さへ乗ればあとから乗つて来る人の事なんかに氣を配らないのが我國の乗車作法である。田舎だけではなく、都會に於てもさうだ。つまり、日本國中がさうである。それと、正當な主張や抗議や質問を發しない事も我國人の特色の一つかもしれない。まるで意志も目的もないやうにぼんやりしてゐる人をよく見かける。但、多少の地位を笠にきてガミ／＼となつたりしてゐる人々は更に下位に屬する。

平湯までフラ／＼歩いて行くと夕方になつた。どこへ泊らうかといふ。「美しい民家を求めて」といふ本にこの旅館の寫眞があつたといふとそれでは此處だといふ事になり上る。お泊りは二圓、三圓、四圓、五圓とある。三圓にした所、夕飯の御馳走は大したものだったので大いによろ

んだ。「二圓にすればよかつた」。二圓になるとカタ落ちかもしれないなどと云つたがさうでもあるまい。尤も今は泊つてゐる人も少ない。

翌二十二日、安房峠を越して中ノ湯へ行く。峠の上はしばらくの間雪が積つてゐて、ミゾレ雪も降つた。静かである。「曾て我等は三人、今は二人」といふブレトンの民謡でも唱つて行くといふ。もつとも、之は獵夫の唱ではあるが。

この自動車道の開通は當時大きく新聞にも出てゐたが舗装もされてゐない。いづれやる気かどうかは知らないが、之では自動車も傷むことであらう。旅行をしてゐると、新規の設置が出来ないのはもとよりの事だが、道路、橋梁又は建物等の破損が修繕も加へられず全然放置されてゐるのが目立つ。それらは従つて加速度に破損して行く。東京でさへ私の家の近くの舗装道路の壊れた所も三ヶ月にもなるが修理をしない。いや、我々の家や道具の修繕も頼む職人の手もなく自分でやるにも「物」がないので壊れるに任せるが、ちよつと直せば使へるものも使へない。國全體として莫大な損失であらう。雨の中を中ノ湯に降りて休む。澤ノ渡からの乗合は十二時過ぎの出てしまつたあと四時過ぎまで無いといふことである。この雨の中を其處まで歩いて行くのは別に興味深いといふ程でもないと思つてゐた所、ちやうど降りるトラックがあるといふので石こ

ろのやうに乗せて貰つて行つたから助かつた。松本發九時半で歸京。

×

以前ならば一年に一度か二度の暇を求めて、これらの旅行をした後は先づ何となく安心をしたやうな心地になつた。又、見聞の廣くなつた喜びや樂しさがあつた。然し、今は、他の氣持が心を占領する。美しい風景の中に在る最中でさへ、絶へず心の中に釋然としないものがモヤ／＼してゐる。幾分間かはそれを忘れてゐる時もあるが、また直ぐ自分の作つた「箴言」——「寧ろ恐るべきは國内人心の荒廢なり」が心に浮ぶのである。旅行中の静かに美しい景色、愉しい談笑と休息、出會つた人々の心地よい印象等と共に、一方、見聞した種々の事柄が、如何にせん、心持を暗くする。統制や配給の事、杜撰な立案者、中間の人々の筋に落ちぬ行爲。そして困つてゐる田舎の人々の事等。彼等にとつて必需品である地下足袋を例にとれば、これらの勞務者には優先的に配給をして困らせぬやうにするとは當局の意見としてはつきり發表されてゐた。然し、以前の幾分一の期間さへも持たない粗悪なものでも馳けづり廻つて探さなければ手に入らぬと言ふ。私は之等の人々の爲には當事者は特に努力をしてゐるものと思つてゐた。其ためには都會では直ちに生活をおびやかす物で無い限り充分不自由は忍んでも良いと思つてゐる。行渡つてゐる

る筈だと言ふかもしない(よくさういふ事を言ふ)、然し、行渡らぬ實情をどうすのか。之も當事者が幾枚か振出した不渡手形の一枚であらう。その上、農民たちはもう一、二年(その當時よりの意味)で以前よりも良い品が以前よりも安値に又容易に手に入るやうになるから我慢しろとさかされて來てゐると言つてゐる。單に一地足袋の問題ではなく更に深刻な不便と不合理とは彼等の上に加へられてゐる。

又、或る村へ、近くの都會の人々が多勢、たゞでさへ手不足と物資の缺乏に悩んでゐる農家に途中分宿して農民たちに心配をさせた話もきいた。勿論、農民たちは一言だつて困つてゐるやうな事は公言しないだらう。又聯絡が悪いのかどうか、期日や人員に行違ひがあつて無駄が出るやうな目にあつても、たゞ勿體ない事だと黙つて思つてゐるだけであらう。之等の事柄は都會に於ても行はれる。恐らく、間に入る町會とか役場とか或ひは「隣組」とかいふものが媚びへつらはむばかり必要以上の「奉仕」をしようとする所から起るものがあると思はれる。私の住んでゐる町に於ても、之等の連中の弊を逆上したとさへ思はれる行爲、感傷的にして、ワザとらしく、大げさな實は根のしつかりしてゐない愛國心、自己満足と見えと外聞を氣にする行爲、後難を恐れる氣持(そんなものはある筈はないのであるが)等によつて多くの迷惑と反感とを實は、住民たちに與へてゐる事を私は知つてゐる。賢明なる人たちならば——否、別に大して賢明である必要もない——假令、中間に入る連中が何を申出でやうと、どれだけの負擔を住民たちに與へ、どれだけ住民たちを疲れせるかは解る筈であり、極力それを避ける方法を講じなければならぬのである。

樂しかるべき旅行の記事が此様な記事をもつて終つたことは遺憾である。

富士ヒユツテと愛鷹山莊

冠 松次郎

富士ヒユツテは御殿場口太郎坊から約十町程上の二子山(二ツ塚)の山麓へ建てられたスキー小屋であつて、静岡縣景勝地協會が約六千圓の經費を以て舊臘落成したものである。建坪五十四坪、收容人員五十名、乾燥室、寢室、別室、それから炊事場、手洗場など相當廣くかつた居心地よい建物である。落葉松、樺などの林を繞らした大きな窪地にある爲風當りも強くなく、後ろは二子山つゞきの緩いスロープで雪崩の惧のない處にある。

二月に入れば、小屋の附近から二子山へかけての好スロープつゞきの變化ある地形を利用して随分よいスキーゲレンデとなると思ふ。一體富士を中心とした總ての施設は多く山梨縣に集まり、静岡縣には實に少ない。富士五湖を中心として山梨領は至れり盡せりであるが、静岡領はまだ全く施設として見るべきものがない。併しそれだけ原始的の色が濃く、富士山麓の荒涼とした大いさを味ふことが出来るとも云へる。その施設の少なかつた静岡縣の地域に、今年創設された静岡縣景勝地協會がその仕事の第一着手としてこの舉に出たことは誠に機宜に適した良い思ひつきであると思ふ。

愛鷹山莊の位置は愛鷹山の最高峯越前岳一五〇五米とその東に派出されてゐる黒岳との鞍部の南の懐に建てられたもので、黒岳まで約三十分、鞍部まで十數分、越前岳の頂まで一時間半の行程にある。その鞍部まで出ると富士が森林の上から溢れてゐる。黒岳へ上ればもう視界は富士で一杯である。その大きな裾野に様々な色調を印してゐる側火山の群、二ツ塚、次郎右衛門塚、平塚、西黒塚、淺黄塚、東白塚、平塚など一眸の下に眺めらるゝ眺絶佳の處である。若し夫れ越前岳に向つて富士見臺の隆起に達すると、富士の南麓を壓して南アルプスの威容が白金の城廓を連ねてゐる。白峯三山、仙丈、鹽見、荒川、東、赤石、聖、上河内など、實に飽くことを知らぬ風情である。越前岳のすぐ富士に面したその麗の山村が十里木である。越前岳の頂から南アルプスを眺みながら十里木へ下り、山口附近に至る景色は愛鷹登山の歸路として實によいコースだ。この山莊は須山村の特志家、日本山岳會員の渡邊徳逸氏が獨力によつて建てたもので、約三棟に分れ、收容人員約五十名、本屋、事務所、湯殿それから離れた處に便所が出来てゐる。登山小屋としては寧ろ幽靜の位置を占めてゐる。

一年中潤れたことのないと云ふ岩清水の、涓滴の音を幽林の中に聴きながら、初夏はその水に集まる様々な小鳥の群を樂しみ、秋は紅葉に包まれ、落葉に寂びて行くこの山莊を繞る自然を味ふことは如何ばかり楽しいことであるか。越前岳と黒岳との鞍部にも茶室風の居ながらにして富士を見らるゝ離屋を建てる計畫だと渡邊氏は云はれた。

要するに大變結構な小屋である。東京を土曜日の午後に出つてこの山莊に一泊して、愛鷹山を中心とした自然を探ることは私等に約束された翌日は六時間間の開始と連續登攀を敢行して、苦しい一日をおくつた。週間の慰樂となるであらう。

因みにこの山莊は落成したが調度

一月號尺岳山の家焼失 に就て藤崎氏に答ふ

瓜 生 正

藤崎氏曰く「今回の尺岳山の家
の焼失は建築の不備に依るものである
(中略) 出火の個所は暖爐からであ
る」と前提し其だ活潑に生氣潑刺た
るものがあるが總て此の前提に因る
もので恐らくは「文責を持つ」とある
も此の前提を肯定してのことと思ふ
瓜生の責任問題も亦此の前提を事
實とする假定に依るとして至極御尤
であり御同感である。併し此の前提
の信疑を追究することは他に災を及
ぼす事甚大なるものあるを想ひ當事
者の意向を尊重し且又此の紙上には
不似合なる問題と成るを恐れ此處に
記載することを差控へる。唯今後此
れに類似の問題が起つた場合に山
小屋關係者に參考になると思ふ二、
三のみを記して答辯に代へる。

一、事の真相に對し甚だ智識乏しき
第三者が當事者と没交渉に單獨發
表を爲すことが有り得ること。
一、唯一人の目撃者殊に問題に直接
利害關係の深い者の目撃談と稱す
るものを過信し真相を誤認し易き
こと。
一、防火を必要とする施設物が常に
燒跡に現然と殘存するは當然の理
であるが、此れが爲事後に於て第
一印象として先入主的感情が働き
判斷に錯誤を起し易きこと。

冬のゼム氷河附近 三

ジョン・ハント
望月達夫譯

(八)ゼム、ギャップ

翌朝(十六日)ハワアンは少し病
氣になつたので、一行の中少なくとも
一人はB・C迄戻らねばならなくな
つた。又深雪中をたつた三人で三日
分の食糧、寝具等を擔つて出掛ける
ことは不可能に近く、その上ハワア
ンの容態は醫者に見せる必要もなく
はなかつた。然しゼム・ギャップに
達することは、之から先のプランを
決める上にも是非必要なこととな
り、結局妻がB・C迄下ることとな
り、バサンと私とで出發することに
した。深雪中の進行は極度に辛く、
常に膝迄入り、時には腰迄も滑るこ
とがあり、又屢々ゴロタ石の間に足
を入れて腋の下迄没することもあつ
た。このやうな單調な労働を五時間
も繰返へして、十六日はやつと三哩
程しか前進出來ず、丁度氷河中央部
の堆石上にテントを張つたのは、又
しても午後の雲が涌き雪がちらつき
始めた頃であつた。翌十七日には不
愉快なブレイカブルクラストを進
み、コル下の氷瀑の基部にテントを
張つた。夜中驚るべき風はテントを
ゆすぶり、入口を破り、吾々はすつ
かり雪をかぶつて了つた。翌朝七時
半に出發して、上方メムヴの尾根か

ら落下せる氷塊のデブリの點在する
斜面を速やかに登り、九時四十五分
コルに達した。こゝにも前人の足跡
が見られたが、前と同じく獨逸の連
中の足跡に違ひない。今迄の猛烈な
寒風と日陰とから、上部の日向と比
較的風陰の地點に脱れ出たことは確
に救はれた感があり、又そこから眺
められたトウインス氷河と、グレイ
ヤ・ラ及びバンディム、更に遙か彼
方ダージリンを圍む山々の景觀は無
上に素晴らしいものであつた。吾々
は南方へ少し下つて、斜面が下方の
雪迄二、三百呎の氷壁になつてゐる
上端迄行つてみた。更にその下には
氷瀑が在つて困難さを示し、その障
害物の爲には網も相當長いものが必
要と思はれた。今一つの可能的ルー
トは左手のクレヴァアスの内側を下
り、次いでシムウ尾根から落下する
絶壁に向つて外に出るものである
が、これとても簡單なものではなく、
後日伴ふべきハワアンとキタアル
は、困難にぶつかつていざと云ふ時
頼りなく感ぜられた。

間以上もかゝつて骨折つて進んだ處
を、僅か三時間半程で下つて了つた。
翌朝(十九日)クックの行動如何
とトウインス氷河の奥を望見したが
それらしいものは見當らなかつた。
そして私はB・Cに戻つてきた。後
で知つたことではあるが、此の日吾
々の去つた後三十分位で、クックも
同じ様に歸へつてきたのであつた。

(九)ノース・コルの偵察

一一・一四—一九
C・R・クック記

十一月十四日、ハント夫妻はシュ
ガ・ローフ氷河に向ひ、私とキクリ
ダ・トンダップの二人はカンチェン
ジュンガの北門なる、その北尾根の
一コルに達せんとしてトウインス氷
河を登つて行つた。ノース・コルは
トウインスと、パウアーの登攀で有
名な北東稜の結合點とのほゞ中間に
位する。そのコルはシニオルチュの
絶頂よりも十三呎高く、又トウイン
ス氷河の萬年雪より二、五〇〇呎高
い。それが位する北尾根は、トウイ
ンス氷河の源頭に峻峻な城壁を張り
繞らし、西方ネパールへの接近を堅
固に阻んでゐる。

岩と氷とからなる、この二、〇〇〇
呎の壁は何處から見ても實に堂々
たるものであり、少し遠方からは全
く不可能にさ見えぬ。にも拘はら
ず若しこの壁が可能ならば、正にカ
ンチェンジュンガ北尾根への直路が
採り得るであらうし、之は又今回の
舉の主要な目的の一つでもあつた。
然し結果に於ては、更に強固な攻撃
を必要とするものであり、吾々は僅
かに少しばかりの偵察をなし得たに
過ぎなかつた。

トウインス氷河の軟雪は深く、そ
の爲にブルダー・キヤムブを去つて
から、二つの氷瀑の下方まで北側の
側面を行つた。そこには右手に堆石
の容易な所があり、之を採つて氷瀑
の上部に出ると、トウインスからの
一尾根の周圍に廣い場所があつて、
風陰の良いテント地を提供してゐ
る。翌日(十五日)のルートは、こ
の時分既に程良い堅雪に覆はれてゐ
る堆石の斜面を行き、上の氷瀑の中
程と同高度で中食にした。それから
雪のクローアールを登りきつて上部
の萬年雪、即ち一九、七〇〇呎の地
點に達すると、諸々の状態が一變し
た。雪は重苦しいブレイカブル・ク
ラストをなし、氷の様な風は約一哩
上方のノース・コルから直接吾々の
膚を刺した。防風衣を纏ひ、又溶け
た雪の爲に靴が濡れて固く氷り附い
てゐたので、急ぎクラムポンを取り
外した。その附近にはよいテント地
とはなく、少し登つて萬年雪を掘
り、その中にテントを張つて、中に
飛び込むや直ぐさま靴をとつた。こ
の激變は、乾いた足の重要さを知ら
しめる一つの教訓でもあつた。

夕刻も風の音は激しかったが、次
第に静かになつていつた。しかしカ
ンチェンジュンガの頂上附近では夜

右三項の如き件々が現貨に起り得ることが今度歴然と立證された譯で今後は山小屋其の他の關係者は宜敷前車の轍を踏まざる様斯かる疑惑の起らざる程に必要以上の大袈裟なる設備を専門度外の政治的意味に於て考慮する必要がある且事後に於て感情より来る錯誤を最少たらしむる一方便としてあらゆる方面より火災に因る損失を計上して充分に其の損失を購ひ盡し得る様な火災保険に加入し置くことである。

右三項の如き件々が現貨に起り得ることが今度歴然と立證された譯で今後は山小屋其の他の關係者は宜敷前車の轍を踏まざる様斯かる疑惑の起らざる程に必要以上の大袈裟なる設備を専門度外の政治的意味に於て考慮する必要がある且事後に於て感情より来る錯誤を最少たらしむる一方便としてあらゆる方面より火災に因る損失を計上して充分に其の損失を購ひ盡し得る様な火災保険に加入し置くことである。

右三項の如き件々が現貨に起り得ることが今度歴然と立證された譯で今後は山小屋其の他の關係者は宜敷前車の轍を踏まざる様斯かる疑惑の起らざる程に必要以上の大袈裟なる設備を専門度外の政治的意味に於て考慮する必要がある且事後に於て感情より来る錯誤を最少たらしむる一方便としてあらゆる方面より火災に因る損失を計上して充分に其の損失を購ひ盡し得る様な火災保険に加入し置くことである。

通し烈風の叫聲が聞えてゐた。十六日、私はキクリを伴ひ荷物を持たずにコルに問つて困難な斜面を登つて行つた。近づくにつれて壁の様子と思つた程ではないことを知り、一旦戻つてダ・トンダツプをつれ一張のテントと三日分の食糧を持參するやうキクリに言ひつけて、私は一人ルートを求めつゝ登つていった。斜面は容易ではあつたが、絶えずステツプカンテイングを強要せられ、又落石に對して不斷の注意を怠ることは出来なかつた。遂に壁面への行手を塞ぐベルグシュルンドに突き當り、辛くも一つのアイスブリッジを見出してシュルンドの上縁に達し、最初の岩場へと急峻な雪を登つたのであつた。

右三項の如き件々が現貨に起り得ることが今度歴然と立證された譯で今後は山小屋其の他の關係者は宜敷前車の轍を踏まざる様斯かる疑惑の起らざる程に必要以上の大袈裟なる設備を専門度外の政治的意味に於て考慮する必要がある且事後に於て感情より来る錯誤を最少たらしむる一方便としてあらゆる方面より火災に因る損失を計上して充分に其の損失を購ひ盡し得る様な火災保険に加入し置くことである。

右三項の如き件々が現貨に起り得ることが今度歴然と立證された譯で今後は山小屋其の他の關係者は宜敷前車の轍を踏まざる様斯かる疑惑の起らざる程に必要以上の大袈裟なる設備を専門度外の政治的意味に於て考慮する必要がある且事後に於て感情より来る錯誤を最少たらしむる一方便としてあらゆる方面より火災に因る損失を計上して充分に其の損失を購ひ盡し得る様な火災保険に加入し置くことである。

右三項の如き件々が現貨に起り得ることが今度歴然と立證された譯で今後は山小屋其の他の關係者は宜敷前車の轍を踏まざる様斯かる疑惑の起らざる程に必要以上の大袈裟なる設備を専門度外の政治的意味に於て考慮する必要がある且事後に於て感情より来る錯誤を最少たらしむる一方便としてあらゆる方面より火災に因る損失を計上して充分に其の損失を購ひ盡し得る様な火災保険に加入し置くことである。

(10) 歸路

(一一・二二—一二・五)

右三項の如き件々が現貨に起り得ることが今度歴然と立證された譯で今後は山小屋其の他の關係者は宜敷前車の轍を踏まざる様斯かる疑惑の起らざる程に必要以上の大袈裟なる設備を専門度外の政治的意味に於て考慮する必要がある且事後に於て感情より来る錯誤を最少たらしむる一方便としてあらゆる方面より火災に因る損失を計上して充分に其の損失を購ひ盡し得る様な火災保険に加入し置くことである。

(續)

新著紹介

この欄を復活し、これからの内外出版物を出来るだけ洩れなく輯録してみたいと思ひますから會員諸氏も讀んだ本の紹介をお寄せ下さい。

氷雪に挑む 朝日新聞社編 菊倍判

八八頁 朝日新聞社 昭一五・一
一・七〇

昨夏刊行された「山と闘ふ」の姉妹寫眞集で、「氷雪に挑みかゝる登高精神の結晶」を集めたものとある。有名、新進とりどりの傑作八十六點がアサヒグラフ式に手際よく配列され、冬期登山の感激を再現して呉れる。單なる寫眞帖でなく、一應纏つたテーマの下に連つてゐるやうで親しみ深いのは、會員藤木、島田兩氏の勞作の結果であらう。

關西學生山岳聯盟報告 第八號

十四年十二月廿五日 岳聯發行
四六倍版 七一頁 寫眞五葉
地圖三面

久しく休刊されてゐた岳聯報告は、過去三年間の記録を要約して發刊された。過去の岳聯報告が示した輝やかしい處女ルートの紹介を、今日求めることは無理に違ひないが、それにしても關西十八校の山岳部三年間の業績としては、過去を顧て寂寥の感なきを得ない。内容は次の通り。

積雪期の黒部川 —— 關西大學
積雪期の黒部横斷 —— 大阪商大
ジャンダルム飛驒尾根——甲南高校
三月の杓子岳、鐘岳 —— //

嚴冬の白山 —— 岐阜高農
臺灣中南部山地 —— 大阪藥專
内蒙古遠征 —— 京都帝大
夏の小興安嶺 —— //

大阪商大の黒部横斷は別記の「雪線」の記事と大同小異、關西大學のものから敢行して、人見平で横斷し鹿島槍を越へて信州側に抜けることに成功したのであるが、この部の方が早く

から黒部の横斷を計畫し、勞多き貴重な偵察を繰返へしてゐるやうである。巻頭の一文はこの附近の積雪期の黒部を知る上に無くてはならぬもの。甲南のジャンダルム飛驒尾根は

十四年三月の登攀で、去る十二年三月初登攀した農大パーティーよりも容易に成功してゐる。ジャンダルム飛驒側の附圖は從來のものより良く出来てゐるが、使用した名稱には首肯

しかねるものがある。(例——潤澤岳、深)。次のものは白馬鐘北山稜(十二年三月)、杓子岳東面(同年同月)の

登攀であり、白山は十一年十二月の石徹白尾根の幕營行、大阪藥專の臺灣行は比較的未開の中南部山岳を

目指した、十二年夏の紀行である。最後の二つの外地遠征は、世界の屋根、亞細亞内奥への關心の發露としての

行であるが、之等の旅行と、内地の氷雪の山岳に於る技術習練との何れ

が、將來より大いな天地を目指す者にとつて必要であるかは、簡單に決定し難い問題であり、今日最も論議せらるゝ點でもあらう。

最後に、各校の三年間の記録が全然はれてゐないのは遺憾である。之は當事者にとつて中々面倒臭い仕事ではあるが、せめて主要な記録だけでも各校毎に整理して戴きたかつた。寫眞五葉の中には残念乍ら一つも見る可きものがない。(T・M生)

針葉樹 第十號
商大一橋山岳部

二年ぶりの刊行、前號には北岳、鹿島槍等を主要内容としたのに、こゝでは「前穂高東面」の一本建ての編輯。一九三七七八にわたる三夏、

二冬のその奥又白谷の登攀が、登攀そのものは豫期の結果は得られなかつたにせよ、そのエルシースンクの過程が貴い経験になつて、また當時

の日記からヴィイツイツドに、しかし要詞的に、その間に起つた隊員の事故なども織りまぜて、丹念に誌されてゐる。この二年間の活動がこれの

みに終始したのでないことは、後者の部誌によつても明なことである。眞の行動に基いた記事がこのやうに

骨子となることは、眞に學生らしく、たのもしい傾向である。ヴァラエテ

イに乏しいといふ批難もあらうが、しかし、この部報と同じやうな古きをもつ他の多くの部報が、とかく先輩の談義や思ひ出などの寄稿に仰いでゐる現状から見ると、却つて學生の

部報らしい行き方をたどつてゐる。商大は今まで殆んど内地の山岳に終始し、その限りに於いてかうした傾向に進むのも當然であるが、今日

としては殆んどこの傾向も一つの飽和状態に達したかの感がある。海外各地に多くの先輩をもつこの部として、今迄内地に固執しすぎてゐたこ

とはいかにも不思議な位で、今後はこんなチャンスも利用して、今日までの國內での試練を生かすために、

大いに大陸の山岳を目指されることを希望して止まない。最後に挿圖も懇切丁寧、寫眞もまた先づ無難、頒價一圓。(T・K生)

わらぢ 第五號
十四年十月廿五日、松本高校山岳部發行 菊版一四〇頁 寫眞七葉

第四號の後をうけて、本號の主要記事も前穂高奥又白谷奥壁に集中されてゐる。此の三、四年間奥又白に

最も執拗な挑戦を繰返へしたのは東京商大とこの山岳部であらう。そして北尾根第四峯の奥又白側正面岩壁の輝やかしい初登攀は、昭和十三年十月六日この部の人達によつて完

成された。巻頭の一文「北尾根第四峯奥又白側正面岩壁に就て」(山崎次夫)には、右の登攀の模様が述べられてゐる。次の「冬山合宿」は十

三年十二月より翌一月へかけての明神岳東稜の幕營行のレポート、其の他白馬大池幕營行、十四年三月の奥又白生活、夏の奥又白及び潤澤生活等の記事がある。この中、春の奥又

白に於ては記録的に取り立てゝ述べるものもないが、夏の合宿では、瀧谷の第一尾根が登攀されてゐる(十四年七月二十九日)。これは恐らく初登攀であらう。積雪期の奥又白岩壁に就いては本號中に求むる處少ないが、昭和十四年十二月には稀有の好晴に恵まれ、この部の人達に依つてかなりの登攀がなされたと聞く。その發表も近き將來になされるであらう。

寫眞は大部分奥又白に關したもので、「四峯正面」は記録的に優れた寫眞であり、ルートの記入は登攀の困難さを如實に物語つてゐる。同じ時に發行された「針葉樹第十號」と共に奥又白奥壁の貴重な文獻である。

雪 第十五號
十四年十一月廿日 大阪商大山岳部發行 菊版一四八頁 膠寫版刷

昭和十三年七月より十四年六月に至る一年間の山岳部の活動を纏めたもの。此の一年の此の部の收穫は三月に於る黒部川の横斷で、横斷隊は

サポート隊の援助を得て、八方尾根から唐松岳を經て五龍岳に至り、更に東谷山尾根を下つて、仙人谷落口

近き人見平にて黒部川横斷に成功(三月三十日)、遂に越中側サポート隊の待期せる仙人池の天幕に達したのであつた。之は確に積雪期に於る

黒部の一收穫に違ひないが、「此の横斷そのものを取上げて見ると何かしら物足りなさを感ずる。それは此の

相當長いコース中に技術的な所とて一箇所も無い爲である。我々の望んで居るのは寧ろ岩と氷に取組み、それを通しての自信、満足感なのではなからうか。」と西村君が記してゐることは、蓋し同感である。

此の外には、夏山の記事其他がある。追悼欄に戦死された芦舩の佐伯榮藏君のことが述べられてゐることは、山で結ばれた友情の現れとして洵にゆかしい限りである。尙懸案の寫眞も中々美しいものが二葉入れられ、一年間の活躍の跡を述べたものとしては先づ無難の部類であらう。

(T・M生)

切 抜 帳

この欄を新設し漸次充實して行きたいと思ひますから、會員諸氏よりの御通信を望みます。

富士で颯落絶命

舊臘三十一日吉田口から富士登山に向つた寫眞業保坂良吉(東京、三二歳)氏は、一日午前八時頃八合目附近で足を滑らし、六合目附近に人事不省となつてゐるのを發見され、吉田町まで救出手當を受けたが同夜七時頃死亡した。

香妻山中で遭難

福島より微温湯を経て吾妻小舎に向つた中村榮三郎(東京、二二歳)一

行五名は、廿一日微温湯を發してから猛吹雪に見舞はれ同夜はその中に立往生、眞先に求援を求めに走つた中村氏は行方不明となり、後になつて殘留者の報知によつて捜査を行つたが、二日死體となつて發見された。

朝日岳の遭難

日本登高會溝口千代松(三十四歳)小澤清一郎(二十八歳)兩氏は去る一月五日朝日岳頂上小屋に滞在すべく相當の食糧を用意し案内者一名を伴つて山麓の朝日鑛泉を出發したが、消息を絶つた。捜査隊は十三日より出動したが遂に發見し得ず一先づ切上げた。詳細後掲。

武能小屋の倒壊

上越國境湯楡川上流に在つた東京鐵道局所有の武能小屋は、去る一月十一日午前八時三十分頃、表層雪崩の餘波を蒙つて倒壊した。同小屋は昭和十年、登山客のために建設され、多くの便宜を提供してゐたものであつたが、倒壊當時は連日降雪あり約二米餘の新雪を見たため、小屋背後の白樺尾根に懸つてゐた雪庇の崩壊によつて表層雪崩が誘發され、文理大白樺ヒュッテの前を通過して湯楡曾川本流に落下した際、その一部が小屋を襲つたものと見られる。當時小屋には新潟師範教諭新谷茂氏(三十三歳)一行八名が泊つてゐて、朝食中であつたが、箸を置く間もなく雪崩に巻き込まれ、奇蹟的に雪中

より脱出した三名の手によつて他の五名も無事救出されたが、階下に居た小屋番父娘は發見せられず不安の中に夜を迎へた。助かつた一行も素足に丹前姿のまゝとて如何ともする能はず、スキー、靴等の發掘を俟たなければ求援にも走ることが出来ないで、そのまゝ文理大小屋に避難してゐるうち、十二日午前十時頃送電線巡視員の手により發見されたのである。生死不明の小屋番二名は救援隊の出動により、倒壊した小屋内の空際に生存せるを發見され、約三十時間の後幸運にも殆ど負傷もなく救出された。

倒壊の状況は三階のうち雪上に出てゐた二階は跡方もなく崩れ、屋根は約七〇米下方の武能深内に、その他も二五米附近まで飛ばされてゐるが、遭難者の談話、附近樹木の損傷程度等より見て、雪崩そのものによつて倒れる以前に、風壓の影響によつて倒れたものと思はれる。なほ遭難者一行の沈着な行動は賞讃さるべきである。

ベデカリ岳遭難

北大山岳部のベデカリ岳登山隊は十二月三十日中札内を出發、コイボク札内川を経て目的地に前進を續けてゐたが、一月五日午後四時頃コイボク札内岳附近に於て雪崩に遭遇、一行九名のうち有馬洋、葛西晴雄、清水誠吉、戸倉源次郎、片山純吉、近藤達、羽田喜久男、渡邊達の八氏

は埋没死亡した。辛うじて難を逃れた一行中の内田、橋本兩氏の通報により九日捜査隊が出動、十五日までに戸倉氏を残す死體全部を收容、二十一日札幌に於て悲しき告別式を行つた。詳細は何れ後に掲載したいと思ふ。

會員通信

安倍 峠 藤島敏男

スキーには稍早し、さりとて高山へゆくほどの時間はなし、思ひついたのが昭和二年の十二月に黒田正夫君といつた安倍峠。

静岡から安倍川に沿ふて梅ヶ島温泉まで、バスに乗つたり、氣血奄奄たるダツトサンを利用したりしていつた。温泉は何年か前に燒失して、浴場も共に改築されて了ひ、昔の面影もなく、まして中村清太郎さんの名紀行「白峰山脈の南半」に描かれたやうな興味は偲ぶよすがもないが自然だけはさして變りもせず、夜更け手拭を提げて、浴場にゆく小徑から、折からの明月の夜空に黒々と聳え立つ山を仰ぐと、大古のやうな静けさをのし／＼と身に感じた。

安倍峠は私の好きな峠のひとつだ。谷から急な登りを十四五町、あとは緩い路になつて、頂上近くは樹の疎林。葉をふるつた梢の間から富士の全容がバツと眩しいやうに目につてくる。やはらかい南國の光が冬

とは思へない暖かきで包んでくれる峠から身延まで三里あまり、同行の友と、人心の不安荒廢今の世より甚だしきはなしと非常時らしい問題を論じておいた。

十四年十二月廿六日

附記 安倍峠の駿河側から七面山へ尾根傳ひの新道が最近開かれた。

恐らくその尾根歩きは素晴らしい展望を楽しめるに違ひない。大井川の奥山が眞白に化粧した初冬にこの道を歩いてみたいと思ふ。

熊本より 坂江善治

初冬の頃當地へ轉住してから、阿蘇の噴烟見物と草山の散歩をしただけで、昨今のやうに底冷えがして来ると、後志や石狩邊にある緩い雪の山へ想像が飛んで洵に始末が悪いです。一月三日

太平洋上より 東良三

急用にて渡米の途上です。明朝は英領カナダのビクトリア港へ着の豫定。全米を驅足で一州して、一月元且はカナデアイアシ・ロツキーの山中パンフの町で迎へようと計畫してゐます。十一月廿日

空いてるスキー地 藤島敏男

技折峠の下の大湯へ行つたのですが、案の定、上越線小出驛でスキーを肩にして下車したのは僕達二人きり。大湯の宿では湯治客さへやつと四五人。淋しいみたいです。

あはよくば一月の駒ヶ岳をと、峠の御堂まで八時間半もかゝつて登つたのですが、非道く寒い一夜を過ごした甲斐もなく、前日の快晴は翌日の吹雪と急變、己むなく退却しました。

峠路から仰ぐ駒ヶ岳は高差からも威容からも實に堂々たるものです。登山季節としては三四月の頃が最も好適といふ話でした。

大湯は練習場といふべきもの存在せず、小出から三里の道は全くの平地で少しも滑りません。それにこの邊では、小供はスキーをはりても大人は一切やりませんから土地ツ子のスキーヤーも見當らず、昨今の雪國風景としては珍らしいです。

大湯へ正月スキーヤーが来ることは極めて稀ださうで、従つて宿に何等の設備もありません。然し僕達はこの静かな谷間の温泉宿の方が詰めの山小舎やスキー宿よりもつとに氣に入り、芋を洗ふやうな練習場などなくても、駒ヶ岳へ登れば申分ないと思ひ、三四日の滞在に満足しました。歸途三里の平地行進に疲れ乍ら、スキーヤーの激増途に吾等をこの地に追込んだりなど、苦笑したことです。一月六日



會務報告

十二月定例理事會並に役員總會

十二月七日 虎ノ門本會事務所

出席 高頭、茨木、黒田、藤島、角田、鳥山、三田、吉澤、石原

加藤、中司(委任)木暮、外廿名

役員總會

- 一、社団法人設立準備其他經過
- 一、本年度會員大會開催手筈の件

理事會

- 一、山日記精算經過報告
- 十一月決算純益五〇圓〇四錢
- 一、山岳編輯報告
- 前報以後追加分北葛澤の記(西岡)
- 一、山岳本年第二號精算
- 發刊費一〇〇〇部七六〇圓
- 一、會報編輯報告
- 十一月本日出來、十二月號印刷所へ廻付済

- 一、會員章整理の件
- 一、本年度收支現在迄の概要
- 一、圖書整理經過報告
- 一、新入會員除籍の件
- 渡邊要次郎氏の入會承認

昭和十四年會員總會報告

十二月十四日 於日本橋商工俱樂部
出席 榎、冠、藤島、高頭、鳥山
中司、吉澤、石原、三田、塚本
他會員十名
(書面反對表決なし)
冠評議員議長となり左の通り
議事を進む

一、事務報告及本年度登山界の回顧
吉澤理事
一、役員非改選の件(九月役員總會に於て決議分) 議長

承認
一、會計報告の件 鳥山評議員
承認(次號掲載)

日本山岳會を社団法人となす件
提案 議長

一、設立者(發起人)の推薦提案の趣旨及經過報告 藤島理事
一、設立趣意書、定款要旨説明 中司理事
一、社団法人設立の上は本會より引續ぐべき財産 鳥山評議員

前記會計報告の通り
以上は十二月七日の役員總會に於て商場一致可決せる旨説明、重要な質議もなく直ちに議決に入り、左の通り商場一致賛成、午後八時十五分決議終了せり

- 一、本決議 「日本山岳會を社団法人組織とすること」
- 二、附帯決議
田部、榎、冠の諸氏を推薦し

社団法人設立に關する一切の權限を委任すること。
(ロ)現日本山岳會の所有する財産は無條件にて法人に繼承すべきこと。

三、諒解事項

(イ)定款案の細目的變更は設立者に一任のこと。
(ロ)現日本山岳會員は社団法人の會員たるべきこと。
(ハ)現日本山岳會役員中原則として會長副會長評議及監事は社団法人の會長副會長評議員及監事に理事は法人の幹事に就任すべきこと。

一月定例理事會報告

一月十八日 於芝虎ノ門本會事務所

出席 高頭、冠、鳥山、木村、三田、藤島、吉澤、加藤、石原、茨木、黒田、中司(委任)小島、木暮、榎

一、社団法人設立準備經過報告
目下厚生省と認可に關する手續打合せ中
一、山岳編輯報告
前月報告追加原稿入手
内蒙古調査旅行(上) 宮崎
外に追悼記二(故河野氏、故赤羽氏分)

- 一、會報編輯報告
- 十二月號を一月號と合併
- 一、登山團體懇談會の件
- 一、事務分擔の件
- 前年度通りとすることに決定
- 一、本年度山日記編輯の件

昭和十六年(一月—十二月)山日記として年末に發刊のことに内定し、具體的問題は岩波に相談のこと、吉澤氏に依頼
一、二月小集會の件
二月十五日(木)商工俱樂部に於て開催
題 ベテガリ遭難の顛末 初見一雄氏の豫定

一、基本金の一部ヲ經常費へ流用の件 承認す
一、新入會員除考の件 左記五氏入會承認す
栗原和輔、網本芳人、加藤武三、萩原時夫、中京山岳會

以上

昭和十五年二月十五日印刷
昭和十五年二月十五日發行

東京市豊島區池袋四ノ四五八
發行兼編輯者 石原 巖
東京市芝區琴平町一(不二屋ビル)
發行所 日本山岳會
電話芝四三(一六四九)
振替東京四八二九
東京市芝區濱松町一丁目十三番地
印刷者 植田 庄助
印刷所 成文堂印刷所